

産科医について考えると……

〈問題点〉

- ・ 勤務体制, 訴訟が多い
→ 人材不足
- ・ 女医が多いと言われている。

〈解決策〉

- ① 訴訟対策
 - ・ 訴訟への対応策を確立
 - ・ 保険制度の整備
 - ・ 学会等からのサポート
 - ・ 患者への啓発活動
(妊娠・出産・分娩のリスクの説明)
 - ・ 第三者機関を活躍させる。

② 環境づくり

- ・ 復帰しやすい環境・システム作り
ex. 女医バンク導入。
- ・ 他職種(助産師等)との協力,
役割分担
- ・ 病院利用者からの働きかけ
(地元との助け合い)
- ・ Dr. の全体数を増やす。

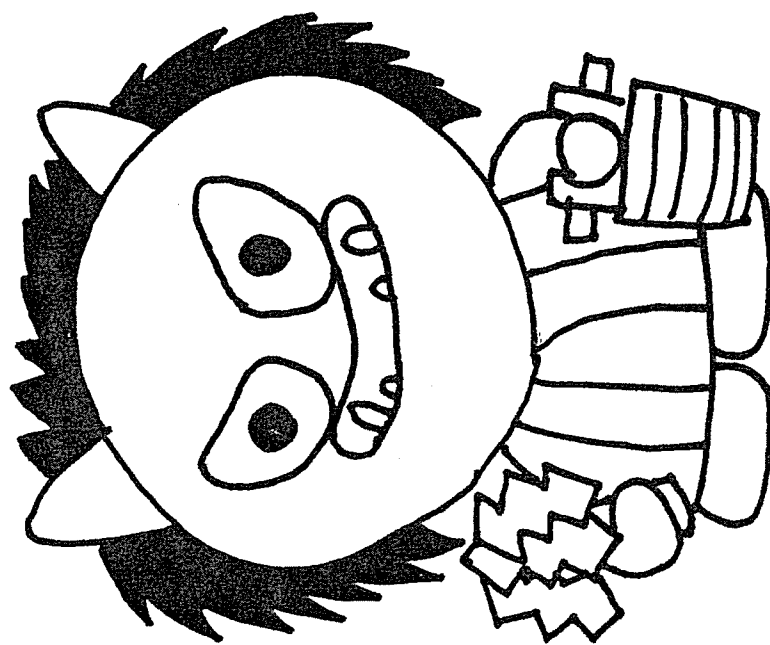
③ 報酬などの充実

- ・ 診療報酬を上げる
(他科の診療報酬とFげる)
- ・ 給料を上げる
(ばせ方で勤務する人は特に)

④ 7"ル-7°

二"静耳聴ありがとうございました

代表 樋口



参加学生報告・感想 (50 音順)

相原 孝典 東北大学医学部医学科 3年

今回サマーセミナーの存在を知ったのは教授が授業中に紹介したのが始まりだった。実のところ最初のうちはそこまで興味を持っているわけでもなかった。というのも、公衆衛生は授業で始まったばかりだったし、興味の惹かれる内容もあったとはいえ、総じて社会医学系の授業はだるいような印象しかもっていなかったからだ。しかし、せっかくの機会だし、興味がないからといってそのことに触れないのもどうかと思い、とりあえず行ってみようと軽い観光気分で思い立ったのが今回参加した理由の主なものだ。

そんなわけで、何かひとつでも得るものがあればいいだろうと軽い気持ちで参加してみたのだが、もっともためになったことといえばおそらく他の大学の人たちとの交流ではないだろうか。部活に属している人は大会などで他の大学との交流もあるかもしれないが、山岳部に所属している自分としてはそのような機会はほとんどなかったもので、違う環境で過ごしている人たちがどんな考えを持っているのかなどを知ることができたのは大きな収穫だった。そのうえ、初対面の人たちとひとつの課題に対して意見を交換することは、そうそうできるのではなく、同じような機会があれば積極的に参加してみたい。

また、このサマーセミナーでは普段聞くことができないような講義を受けることができたのもよい経験だ。そのひとつが厚生労働省の役人による講義である。他大学の方による講義などは授業で聞く機会もあるのかもしれないが、役人の話はそんなに聞くことのできるものではない。普段はなじみのない医系技官や官庁の視点からの公衆衛生についての話など今回ここに参加しなければ聞けないような話ばかりであったため、当初参加を思い立ったときの予想以上のものが得ることができたように感じられる。それだけでなく、さまざまな先生のいろいろな話題は軽い気持ちで参加したにもかかわらず十分興味を惹かれる内容で、これだけでも参加した甲斐があったというものだ。

以上のように、感想というか単に思いついたことを羅列しただけの気もするが、総じてこのセミナーに参加できたのはほんとにいい経験だったと思っている。始まる前はちょっとした興味で行こうと思っていただけだったのに、終わった今考えてみると、あの時申し込んでおいて正解だったわけだ。次の機会はどうなるかわからないが、こういう機会があればいろいろと積極的に参加してみてもいいような気もする。

小沢 昌慶 筑波大学医学専門学群 5年

今回、私は3回目のセミナー参加となった。最初に参加したときは社会医学とは何かを知り、前回では社会医学の世界の広さを強く感じた。今回は、幾らか精神的に余裕が出来てきたからか、参加した方々の考え方に触れることが出来た。

大学に属した日々を過ごしていると、どうしても属している機関の外部の人々と触れ

る機会が減ってしまうのではないかと感じてしまう。特に同じ立場にいることが出来る機会が減ってしまう（子供のころは成長に従って、自分が立つ世界は広がっていくと感じていたが）。5年になると入学をともにした他学部の同級生も卒業してしまった。また、筑波大学はほかの大学と離れてしまっているため、交流の機会も少なかった。

そのため、今回のセミナーでは、ディスカッションを通して他校の参加者と意見の交流が出来たことが、自分にとって得ることが多かった。自分の普段生活している世界だけでは知り得ないこと、考え付かないようなことなどに触れる機会ができた。

未来科学館で毛利館長からボランティア研修時に聞いた点であるが、科学を如何にして社会に還元するか、社会と科学はどう向かい合うか、という点が現代の課題である。医学自体が社会で用いることを前提とした科学ではあるが、社会が医学に望んでいることは何か、医学は社会にどのような働きかけが出来るか、医師（医療従事者）は職業人としての側面もあるが、科学者としての視点で考えることも重要であるとする。そういった点で、今回のセミナーで学んだことはひとつのモデルとしてたいへん勉強になった。

私がセミナーに参加して今まで、筑波大学からの参加者が私以外にいなかったことは、残念な点であった。

貫戸 幸星 近畿大学医学部 6年

都会の産業廃棄物で起きた環境問題について考えよう

(概要)

秋田県能代市に昭和55年9月、一般産業廃棄物処理及び産業廃棄物の最終処分場が建設された。センター周辺には複数の川や沢が存在している。その沢から流れる水は下流の水田の農業用水に流れている。

センター創業以来、周辺には悪臭が発生し、センター風下の住居の住民には頭痛・吐き気・嘔吐・不眠などを訴える者が増加した。また、汚水などにより生活被害・農業被害が発生した。

その後、センターは平成10年12月に倒産し、それ以後秋田県が事業主に代行し、維持管理等の環境保持対策を実施しているが、平成10年から14年までの間に支出した経費は16億3100万円にのぼる。

(討議の課題)

① 都市部のごみを農村部で処理することの問題点は？

- ・ 問題となるのはごみ処理場による周辺への被害がでることである。被害が出なければ問題にはならないと考えた。仮に被害がないのならば、農業以外に産業のない地域に新たな産業ができることは歓迎されることだろう。

↓

現実には健康被害・生活被害が生まれてしまった。

↓

不法にこの処理業者が廃棄物処理を行っていたわけではない。

↓

創業許可は知事が出しており、創業前には設計・建築の段階から市の監査を受け合格している。加えて、悪臭被害、汚水被害が周りの住民が訴えたさいに、行政が水質・土壌調査を行っているが、あらゆる物質は法律にさだめられた基準値以下の結果であった。

しかし、後の調査によるとその当時は規制外であった揮発性物質（voc）の流出が検地された。

2004年の大気汚染防止法改正により、浮遊粒子状物質、光化学オキシダントの生成原因となるVOCの排出が規制されるようになった。

↓

周りへの被害も出ない対策をとり、それを行政側も認めている。

↓

なぜ、被害が出たのか？

↓

考えられるのは、行政の規制・定めた基準が適切ではなかった。

後に、被害の原因となったvocは規制されている。

↓

この産業廃棄物処理場が稼動していた当時には、健康被害の恐れのある物質として認識されてはいなかった物質が被害を生み出してしまった。規制は健康を損なう物質である根拠が無いと出来ないうえに、現在生まれてくる化学物質をすべてスクリーニングすることはできない。ある意味致し方の無いことであるが、このような事態におちいった場合には迅速な原因究明が必要である。この事例では、そのような動きが遅いように思える。

↓

当時の環境被害への認識が薄かった。

都市部よりも農村部は環境に対する配慮が薄いことに加えて世に状況が広がりにくいいため、より繊細に慎重に都市計画や産業の発展を行わなければならない。

農村でごみの処理がされるのは自由競争の社会では致し方ないことである。農村のほうが建設コストが少なく、住民の絶対数が少ない。反対運動をしても都市に比べて勢力は弱い。農村にとっては新たな産業が生まれることは何よりも歓迎することである。このような理由で都市よりも農村にごみ処理場が作られてしまう。

民間ではなく行政がするべきだったのかもしれない。実際、一般ごみは行政が処理している。民間ではコストの削減などの良い面もあるが危険性は高まる。それに対しての監視・指導を強化する時期が来ている。

② 環境の悪化に対するコストを誰が払うべきなのか？

企業が倒産してしまえばその後のコストは企業が出せるわけではない。

↓

では、責任は企業以外には？

↓

許可を出した知事、適正な基準値を設定しなかった行政に

↓

どちらにしろ、税金が使われる

↓

税金を使う他、お金の出所は無い

↓

では、ただ維持するのではなく、民間企業などに違う産業に使わせるなどしてコストの削減を施行すべき。

(今後の対策)

現在、ごみの量が急激に減ることは無いだろう。処理できる場所は都市部にはもはや少ない。民間が処理をする以上コスト優先は避けられないため農村での処理はいたしかたない。が、周辺への安全が確保されるような処理をする制度が必要である。それには、随時時代にあった規制値と処理の方法、安全基準を設定するべきである。

それに加えて、周辺住民のごみ処理に対する意識の向上を市町村がはかり、危険性のあるものに対して、その危険性を察知理解し、行政にすべてをまかせ問題が起きた後に騒ぐのではなく、問題が起きる前に何らかの行動を起こせることが環境保全には大切だと思われる。

ごみ処理など生活環境に関わることは、単独ではなく企業・行政・住民の三者一体の対策が必要である。

環境省は能代産業廃棄物処理センターに対して別途廃棄物処理法に基づく措置命令を発出し、責任を追及している。また産廃の排出事業者の委託基準違反が判明した場合には、排出事業者に対しても措置命令を発出する方針である。

社会医学セミナーを通して

- ・ セミナーを受けたことによって、臨床よりもあやふやなイメージしかなかった社会医学が、より鮮明になりました。実際の医学部教育の場では、臨床のことが95%をしめており、その他の医者としての仕事にはほとんど触れられません。自分の医師免許を持つ人間としての別の選択肢があることを実感できた良い機会でした。
- ・ セミナーの講義は非常に興味深いものも多数あり勉強になりましたが、せっかく他大学の医学部生が集まっているのだから、集団での討議の時間をもっと増やしてクリエイティブなセミナーにしても良いと思います。

小林 沙織 千葉大学医学部 5年

私は今回社会医学サマーセミナーに初めて参加しましたが、大変有意義な三日間を過ごすことができました。

まず、今回のように、社会医学の様々な分野の大家である先生方のお話しを聞ける機会は学生のうちは学会にでも参加しない限りなかなかあるものではありません。このセミナーで最近注目されているアスベスト問題、新型インフルエンザ、など様々な興味深いお話を聞くことが出来、勉強になりました。他大学で行われている講義を聴くことが出来、面白い先生の講義は自分の大学でも聞けたらいいと思いました。非常に興味深かったです。学生対象の講義ということで、質問も自由にする事が出来たので疑問点を解決することが出来、大変有意義でした。

また、グループ別に与えられた課題も、非常に重要かつ興味を引かれるものばかりで、自分の与えられた以外の課題についても考える機会となりました。私は産婦人科医の不足という今現在まさに大きな問題となっている課題についてグループ内で討論しましたが、解決法を話し合っているうちに、一筋縄ではいかない現状を認識し、考えさせられました。少し前に女性医師を選べるようにしてほしいといった社会の要望から女性が増加し、そのことが必然的に労働力不足を招いてしまった皮肉、また女性医師の出産・子育てが他の産婦人科医の負担を増加させ、なり手が減少していくという悪循環に陥っていることもわかりました。誰でも便利でかつ有名な病院が多い都市部での就職を希望し、地方での医師不足がどんどん進んでしまっていること、しかしこれには偏差値の高い医学部に入学する学生のほとんどが学習塾などの環境の整っている都市部出身者に偏っていることが原因と考えられました。

その他にも医療廃棄物の問題にも関連してくる産業廃棄物の問題、自殺予防の方法など興味深いテーマばかりでした。

今後日本ではごみ問題は大きな問題になってくると思うので、いろいろと考えさせられました。自分は都市部に住んでいるためなかなか実感はわかりませんが、実際に自分の県にごみ処理場が建設されているという参加者の意見があって、もっと身近な問題として考えなくてはいけないと感じました。また、自殺に関しては、東北地方に自殺者が多いということは以前から知っていて、寒いせいでうつ病や引きこもってしまう人が多いせいかと思いついていたのですが、以前はそのような地域性が見られていないことを知りました。

本当に今回参加した社会医学サマーセミナーは私にとって大きな意味があったと考えます。将来社会医学の方面に進むことを本気で考えられたことは重要な経験でした。このような貴重な機会を与えていただいたことを深く感謝申し上げます。

島田 美幸 東北大学医学系研究科環境保健医学分野 修士 2 年

第 12 回社会医学セミナーに、はじめて参加する機会を頂けたことにまず関係者の本橋先生をはじめとする諸先生に感謝申し上げたい。本当に貴重な機会をありがとうございました。

私が今回参加したいと考えた理由は、自分の将来のビジョンをどう進めていくかという選択の中で、人生の先輩である先生はどのような選択をしていたのか、あるいは同じような年齢の社会医学に興味を持つ学生がどう考えているのかという 2 点について話ができれば、伺えたらと思い参加しました。開講式において高野先生が 3 点伝えたいということで、1 点目に社会医学の重要性が増大と共に、医学を社会に応用する社会的情勢があること、2 点目に社会医学への接点、3 点目に社会医学の専門家を養成という 3 点についてお話頂き、改めてこの道に進んで間違いないと感ずることができ、またセミナーを通して厚生労働行政について、あるいは先生の社会医学との接点、歩み方についての普段なかなか伺えない話が伺えたことは、これからの進路を考える学生（もちろん私も含めて）非常によかったと感じられました。グループワークでは、同じ学生で異なる背景の学生同士で意見を交換し相互交流できる機会は非常に重要であると思いました。こういった経験を得る機会は、非常に重要であり非常に稀な機会であるこのセミナーでもっとも力を入れて良い部分だとも考えられました。もう少し時間をとって良いように思われたし、グループ間の意見交換等があっても面白いのではと感じられました。

今回の参加したい通してはじめに立てた目的は、十分達成できたと考えておりますし、自分の人生の財産となる貴重な人との出会いもあり、夜な夜な飲み明かして下さった先生や仲間にも恵まれ、本当に充実した時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

鈴木 瞬 高知大学医学部医学科 4 年

先日の社会医学サマーセミナーでは大変お世話になりました。僕は昨年に続いての貴セミナー参加だったのですが、昨年にも増したセミナー内容の充実ぶりに驚かされました。

まず特別講演に関していえば、講演内容が高齢化社会から、アスベスト、初期臨床研修や新型インフルエンザなど、非常にタイムリーな話題を含んでおり、どのご講演も大変興味深いものばかりでした。なかでも今回印象的だったのが、圓藤吟史先生の「産業医学のすすめ」と、村田勝敬先生の「環境保健領域におけるメチル水銀」です。両分野とも社会医学的に重要な項目でありながら、大学医学部のカリキュラムではなかなか深く触れることのない分野だったので、大変貴重なものを感じました。特に産業医学に関して付言すると、産業医学は米国などでは専門性の高い分野として評価されていますが、あまりなじみのない多くの日本人医学生にとっては、その業務内容が正確に理解されておらず、軽視されているように感じます。日本でも産業医学の専門性をますます高め、医学生に教育する

場が必要だと感じます。

グループディスカッションに関してですが、我々の課題は「自殺率とその地域格差」ということでした。しかし地域格差というものを立体的に捉えるために必要な社会経済面、医療経済面の予備知識、また土地土地の気候、風土に関する理解がならず、途中途中根拠に乏しい議論を進行させてしまう面がありました。メンバーの多くが初対面ということや、時間的にも情報量としても限られている状況であったことを考えると、グループとしての全体的な機能は非常に高かったように思います。

テクニカル・ビジットや懇親会など、まだまだ書きたいことがたくさんあるのですが、長々となってしまうので割愛させていただきます。21世紀は益々社会医学、予防医学の重要性が高まる時代であり、医療分野に進む学生にとって益々重要性を持つ貴セミナーに来年度も是非参加したいとおもいます。最後に、今セミナーにおいて、準備を含めて始めから終わりまで大変お世話になりました、本橋先生、金子先生をはじめとするセミナー事務局の皆様、また貴重なご講演やお話をいただきました諸先生方に厚く御礼を申し上げて感想レポートとさせていただきます。

関根 綾希子 東京大学大学院医学系研究科地域看護学分野 修士1年

1. 参加目的

私は高齢者への保健活動にとっても関心があり、今後の研究課題としてその問題について考えていきたいと思っている。だが、なかなか問題を明確化できず、今回のセミナーを通して研究課題に対するヒントが得ることができればと思い、参加を希望した。

2. 学んだこと

①これからの高齢者への保健活動としてアクティブレベルを高める対策を考えていくことの大切さ

これからの保健医療の課題として、健康寿命をいかにのばすか、介護期間をいかに短くするかが挙げられた。これまでの延命医学からの変革である。健康寿命の延伸のためには、アクティブレベルをいかに高めるかが重要になってくると言う。アクティブレベルにはその人の性格や活動状況などが影響していると考えられているが、その要因を明確にし、具体的対策(アプローチ方法)を検討していく必要性を学んだ。

②健康問題に対してチームアプローチをしていく大切さ

これまで他職種(看護職以外)の人たち時間をかけて話し合う機会があまりなかった。医学生の中に混ぜていただき、ひとつの事象について様々な視点で考え、アプローチしていく必要性を改めて感じた。やはり、そのときにはそれぞれの専門性を生かし、役割分担し、互いに尊重し合い活動することが重要であると再度確信した。

③人間関係の輪を広め、広い視野で物事を考えること

今回のセミナーでは、魅力的な講義以上に夜の酒盛りが学びを深める重要な時間であった

と思う。相手の話を聞いているだけでなく、自分の意見や考えを話し、他者とディスカッションできたことは一番の学びとなった。それは社会医学に関するだけでなく、人生のこと、社会の現状など広い範囲に及んだが、その時間を通して新たな考え方の視点をしることができ、視野を広げることができたように思う。また、学生だけでなく、先生方もディスカッションできたことがさらなる視野の広がり、知識の深めにつながった。

3. 反省と今後の課題

①向学心を持ち、積極的な姿勢で学びを深めること

講義など集団であると質問したいと思ったこともなかなか勇気がなく、質問の機会を逃してしまうことがしばしばあった。集団の中になると、どうしても消極的になってしまう自分を改善する必要があると思いながら、なかなか改善できないでいる。さらに、社会医学の分野で最先端の研究をなさっている先生方の貴重な講義を受講する機会にも恵まれたにも関わらず、その機会を十分に活用できなかった。より向学心を持ち、講義に挑み、学びを深めていく積極的な姿勢を持つよう努力していきたいと思う。

今回の学び・反省を、今後の研究や実践活動に役立てていきたい。まずは、今回の学びを生かし、修士論文に取り組んでいきたいと思う。

4. 最後に

医学生でない私をもセミナーに参加させていただきまして、本当にありがとうございました。充実した3日間となりました。

主催していただきました先生方、講義をしていただきました先生方、関係者皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

高濱 隆幸 香川大学医学部医学科 4年

確か5月だったと思いますが、公衆衛生学の講義の後、「秋田でおもしろそうなセミナーがあるよ」と教えてもらいました。大学の中では社会医学に興味を持っている者が少ないため、全国に散らばっている関心の似た学生と出会うことに大変興味を持って参加することにしました。

出発前、今回秋田では「名刺を40枚配りきることにしよう」と決めていました。というのは、将来にわたって情報交換できる先輩・友人を作りたいと思ったからです。結果、参加者や先生方にも顔を覚えていただくことができたと思っています。

今後ともぜひ様々な場所・機会で教えを乞いたいと思っておりますので、ぜひともよろしくお願ひします。皆が参加するメーリングリストを通じて、情報交換が活発にされることを期待しています。

さて、大学で臨床の講義も半ばを過ぎ、将来の進路を少なからず意識しだす時期にこのようなセミナーに参加できたことは大変意義深いものがありました。それは先にも書いたように、似たような夢を持った学生との交流が持てたというだけでありません。

大学に入って最もインパクトのある「臨床は社会医学の基礎である」という言葉を、大阪市立大学圓藤先生から頂くことができたからです。この言葉を学生の部屋で、先生と少しばかりのお酒を飲んだ場面で聞いたことも貴重な体験でした。

この一言は、働き始めてから社会医学と臨床医学の両立、はたまた、どちらか一方にするか迷いをもっていた僕にとってみれば斬新な見方でした。学校保健、医療教育学、行政の仕事に興味を持ってはいますが、人生設計を考えたときに将来のある時期で研究を始めよう、と決めることは難しいことでした。けれども、臨床をすることは決して回り道ではなく、社会医学を考えるための基礎になっているのだ、と考えられるようになりました。

今回のセミナーでは、分子疫学と社会医学というテーマで講演なされた高知大学の中村先生のお話を伺えたことによって、この学問の奥の深さ、懐の深さに再び感心しました。自分がやりたい、調べたいと思っていることが社会から必要とされているかどうか見極めるためにも臨床体験であるとか、経済学の知識を持つことが大事であることを教わった気がしました。

最後になりますが、社会医学に携わる先生方、厚生労働省の医系技官の方の生の声を直接伺うことができた今回のセミナーは、私の今後の進路設計の中でも大きなウェイトを占めることになるだろうと思っています。本当にこのような機会を私に与えてくださったことに感謝しています。本当に皆様、ありがとうございました。

辻 敦美 東京医科歯科大学医学部 6年

秋田から東京へ戻る新幹線の中でも、熱が冷めず、セミナーでの出来事を反芻していた。刺激の多い2泊3日だった。

セミナーでは、大きく3つの収穫があった。

一つは、社会医学に興味を持つ学生同士で意見交換をできたこと。普段新聞など社会医学的な問題を知る機会が多いが、それを誰かと共有する機会は乏しく、今回のセミナーでそのような時間を得られて大変勉強になった。

二つ目は、社会医学の広がりを感じられたこと。各大学の先生方が、ご専門の内容についてお話してくださったが、循環器疾患の疫学といった臨床に近い立場もあれば、アスペクト問題という社会問題に踏み込む分野もあり、社会医学の扱う分野の多さに驚いた。

そして何よりも、他学の学生・先生方・厚生労働省技官の方とお話しできたことが大きな収穫だった。これまで社会医学に対して、なかなか研究されたことが実際人々に還元されていないような物足りなさを感じていた。しかし臨床経験を生かし、実地で働く先生方の姿や思いはとても印象的であり、これまでの社会医学の認識が変化した。それは同時に自分が将来進む道の選択肢を広げてくれた。

このように充実した時間を過ごすことができ、大変満足しているが、いくつか改善点を挙げるとすれば、その土地特有の社会医学的問題を見るといった土地柄を生かした内容が

あれば、社会医学の「フィールドに出る」という側面を体験するという意味で良かったのではないと思う。臨床医学は臨床実習という現場体験がある一方で、社会医学ではそのような体験は少なく、学生が現場の面白さを実感する機会は貴重だと感じたからである。また、学生のグループ討論に、社会医学を専門とされる先生方もチームに加わってくださると、より根拠のしっかりした議論ができたのではないと思う。

大学病院での臨床実習を終え、臨床医学を学ぶと同時に、患者さんの背景にある社会的問題にもたくさん直面した。それは今回セミナーに参加した動機の一つでもあった。

そしてこの機会を通じて社会医学分野の多彩な領域を知り、「そういった問題に対しても、医療者としてアプローチできることがたくさんあるのではないだろうか」と考えていると、新幹線は東京駅に着いた。

最後に、セミナーを運営してくださった先生方、たくさんの刺激をくださった参加者の皆様に感謝申し上げます。

寺田 実奈 高知大学医学部 6年

念願の社会医学サマーセミナーに今夏ようやく参加することができました。3日間のセミナー日程中、私が参加することができたのは2日間でしたが、1週間以上秋田に滞在していたように錯覚します。大変濃密な時間を過ごし、医学部最終学年の夏にかけがえのない経験を得ることができました。

将来、健康を保つ—予防医学や保健活動に係わる臨床および研究に携わりたいと希望しながら、どのような道を歩むことができるだろうかとずっと思案しています。大学の公衆衛生・環境医学の講義にも関心を寄せてきましたが、机上で学ぶには限りがありました。このたび、社会医学サマーセミナーに参加することができて、特に貴重な機会を得たと感じた点を以下の3つにまとめました。

第1に、私が参加した2日間において、5人もの講師陣の先生方の講演を聴講することができました。大学の講義には講義目標があり、ある程度一般化されたもの、あるいは必須である知識を得ることが求められます。限られた時間で進行形の研究や取り組みを聴く機会は多くありません。こんなにもやりがいのある広い分野が存在しているということを実感することができ、感激しました。とりわけ、先生方が社会医学分野の中で日々歩まれてきた道を直接伺うことができたことは、自分自身の将来を考える上で貴重な糧となりました。

第2に、このセミナーに集う学生と出逢えて、かけがえのない輪が広がったと感じています。最終日のグループ発表および総合討論に向けて、即席で課題に取り組み、熱意溢れる学生と時間を忘れて議論しました。大学を離れて秋田という地に集まり、寝食を共にした課外活動を通して、同じ目的を共有できる仲間との一体感はとても心地よいものでした。医学生としてさらなる目標を自覚しました。

第3に、訪ねた地域を知る機会が与えられているセミナースケジュールに感嘆しました。2日目の午後に昼食を兼ねて大潟町に出掛け、干拓博物館に行くことができました。社会医学は、地域に暮らす人間の健康をみつめ、それと同時に取り巻く背景をみつめる過程のように思います。歴史、文化、産業、環境といったさまざまな因子が日常生活に影響しています。今夏セミナーを機に訪れることとなった秋田の土地の背景を少し垣間見ることができたことは大きな収穫でした。

6年次の夏、社会医学サマーセミナーに滑り込みで参加できて幸運でした。マッチング試験の日程を加味して下さり、部分参加にも係わらず、快く受け入れて下さった先生方、学生の皆様に心から感謝しています。

長沼 透 東北大学医学部医学科 3年

この夏に、第12回社会医学サマーセミナーに参加し得られた経験は、何にも代え難い貴重なものであります。3日間と短い期間ではありましたが、大学での社会医学の講義の全てを濃縮した様な、非常に濃密な時間を過ごすことができました。

3日間に渡って聴講した講義では、疫学から産業医学、行政、衛生学、国際保健に至るまで、非常に多岐にわたる分野のお話を聴け、多くのことを学ぶことができました。私は、疫学と行政に強い関心を持ちこのセミナーに参加したのですが、今までに他の分野について積極的に学ぼうとする機会をそれ程設けてこなかったのが、今回様々な領域でご活躍なされている先生方のお話を聴けたことは、とても貴重な経験になりました。今回の様な短期間でこれ程まで幅広い、それも第一線でのお話を一度に聞く機会は今まではもちろんのこと、今後もそうそう経験できる様なことではないと思います。また、グループ課題では非常に限られた時間の中で、その上、初対面の面々の中で、課題に取り組む難しさがありました。最終的に班の全員が納得できて発表に至れたかはわかりませんが、それぞれが協力して一つの課題に向き合えたことは、よい体験になったと思います。

このセミナーに参加して得られたもので何よりも素晴らしいものは、多くの先生方、そして学生の皆さんに出会えたことです。様々な立場の先生方はもちろんのこと、様々な立場、考えを持って参加した学生の皆さんと交流できることが、この社会医学サマーセミナーの醍醐味だと思っています。特に連夜に渡る交流会で、(お酒を交えつつ)近い距離で話し合えたことは何にも勝る経験でした。短い期間でしたので、ほとんどお話しできる機会のなかった方々もいらっしやっただのが、心残りです。

私は、今年のセミナーは昨年の第11回に引き続きの参加になりました。今回は前回とはセミナーの進行方や、先生方、学生の構成が大きく異なり、2度目でしたが新鮮な気持ちで参加することができたのも大変幸運なことでした。また来年以降も、機会があれば参加していきたいと思っております。

最後になりましたが、貴重な経験を共有できた学生の皆さん、今回社会医学サマーセミ

ナーに参加いただいた諸先生方、代表世話人の高野先生、そして第12回世話人としてこの素晴らしい機会を提供して下さった秋田大学の本橋先生、金子先生にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

布田 典子 昭和大学医学部 5年

高名な先生方のセミナーを数多く受けることができ、様々な方向から社会医学を改めて考えるよい機会となりました。特に、遺伝子診断を用いたオーダーメイド予防が社会医学の中心的なテーマになりうるという、中村先生のお話はとても新鮮に感じられました。また、セミナーでは、単に研究に関してだけではなく、各々の先生がどのように社会医学と関わってこられたのかも伺うことができたことは、将来如何に社会医学と関わっていくかを考える上で、大変参考になりました。

グループ討論では、どのテーマも都市と農村の格差を考える上で大変興味深いものでした。都市部で暮らしている私にはあまり身近に感じられない話題についても、全国から参加している学生同士で議論することでより身近なものとなり、都市と農村の格差の是正について改めて考えることができました。

全国の大学の社会医学に携わる先生方や厚生労働省の先生方の懇切な御指導を、社会医学に興味のある他大学の学生とともに賜ることができた今回のサマーセミナーは、医系技官を志す私にとって、大変貴重な体験となりました。

最後となりましたが、御繁多の折、懇切な御指導を賜りまして誠に有り難く篤く御礼申し上げます。

東山 央 大阪医科大学医学部 4年

この夏休み、第12回社会医学サマーセミナーに参加した。基礎科目の中では公衆衛生学に最も興味があり、また実習で検疫所を訪れた際、行政職・医系技官という職があることを知り、興味を持っていたところ、大学で今回のサマーセミナーの掲示を見つけ、参加してみることにした。周囲に声をかけたものの誰も興味を持ってくれず、大阪から一人での参加で多少不安であったが、実際行ってみると予想以上に楽しかった。

社会医学に関する講義、グループ学習をはじめ、テクニカルビジットということで大潟村も訪れ、美味しいフレンチをいただき、干拓博物館を見学し、温泉も楽しんだ。またそれら以上に有意義だったのは、毎晩の先生・学生一緒の飲み会だったかもしれない。

‘社会医学’このキーワードで集まった学生、各地の大学の公衆衛生・社会医学系の先生方、厚生労働省の医系技官の先生方と医学・医療や将来の進路についてお話することが出来、大変有意義であった。先生方とは勿論のこと、普段、他大学の学生と将来の話などを語れるという機会はほとんどないと言ってよく、大変刺激になった。

夜の飲み会の時、地域の産婦人科医不足が話題になった。その時、ある医系技官の先生が「冷たい言い方かもしれないが」と釘を刺した上で「田舎に住むということは、それなりのリスクを背負っているのだから、お産の為に都市部に出てくるのは仕方ない」とおっしゃっていた。田舎出身の私としては少し複雑な心境であった。そして今回最も印象的だったのは、秋田大学の金子先生が「秋田で講演をすると、地元の方から『あなたは秋田に来て何年目や?』と言われることがある」とおっしゃっていたことである。'都市と農村の健康格差'この問題を考える時の難しさがここにある気がした。

'社会医学'に興味を持って集まった23人の学生と、日本の公衆衛生・社会医学、また医療行政の第一線におられる先生方と2泊3日寝食を共にする。こんな貴重な経験はまず出来ない。来年は奈良で開催されると言う。是非また参加してみたいと思う。

最後になりましたが、秋田大学を始めとし、この社会医学サマーセミナーの開催に関わっておられる先生方に深く感謝致します。

樋口 洋介 岡山大学医学部 5年

社会医学サマーセミナーで得たもの

今回私がサマーセミナーに参加しようと思った動機はもちろん社会医学への興味もありましたが、部活の先輩が2年前に複数参加していて評判が良かったというのがあります。秋田という岡山から遠い開催場所も、人生で初めての東北地方でこういう機会がなければ滅多に訪れることもないだろうというやや観光も兼ねた、目的に十分適った場所でした。講義では各大学から来られた社会医学講座の先生方による力が入った講義を受けることが出来てとても刺激になりました。社会医学とは臨床医学が持ち得ない医療制度あるいは社会そのものを変革する力を用いる唯一の学問だと考えているので、各先生方のテーマが世の中をより良い方向に変えていけることを期待しています。

八郎潟のテクニカルビジットはそのスケールの大きさに驚きながらも、これだけの事業を成し得た当時の国の力とその後の迷走する利用について国策の運営の難しさを思い知りました。

グループ討議では少ない時間ながらも始めて会った人達とその場で一つの課題について真剣に議論するという基調かつ充実した体験をすることが出来ました。

我々のグループ課題は「地方の医師不足について」でしたが、医師の偏在と医療格差の問題について色々考えました。医師の偏在については、田舎で診療する医師にもっと手厚い人的・金銭的援助が必要であり、あるいは医師の足りない地域への医師の派遣制度を創設すべきだと考え、医療格差については道路や救急体制を整備することで医療アクセスの改善を図ればよいのではないかと考えました。

また、私はそもそも医師の数が足りないのであれば医学部の学生を増やせばよいという提案をしたのですが、サマーセミナー直後の8月31日に『厚生労働、文部科学、総務、財

務4省は、医師不足が深刻な地方の10県について、平成20年度から暫定的に大学医学部の入学定員を増やすことを正式に決めた。また、自治体からの要請に基づき緊急避難的に医師を派遣するシステムの構築など総合的な医師不足対策を盛り込んだ「新医師確保総合対策」を発表した。』というニュースが出て、非常に驚きました。医師不足の問題について国が踏み込んだ介入をするという画期的な判断ではあるものの、単純に定員を増やすだけでは結局都会から地方にやってきてまた都会に帰っていく医学生を増やすだけに繋がるのではないかと疑問が残りました。枠を増やすのであれば全て地元枠・地域枠でなければ意味が無く、その様な対策を各大学医学部が取らなければならないと考えます。

医療費の増加を抑えるために医師の総数を抑えてきた一方で、臨床研修制度の導入による医師の都会への流出を読めず、深刻な地方の医師不足を招いた国の責任は大きいと考えます。これまでも医師の過重労働や小児科・産婦人科の不足についても結局は医師のボランティアに近い精神性・犠牲の上に医療が成り立っている現状を考えるに、国の政策として是正を図るべきではないかと私は強く考えるのです。八郎潟の例にあるように、国の政策が長期的に正しいことが保障されているわけではなく、不都合が起きるたびに迅速に対応する必要がありますが、現実には事態が深刻化してからようやく重い腰を上げることが往々にしてあります。公害が良い例です。改善のためには現状がどうなっているのかを適正に評価せねばならず、その上で社会医学が統計という道具を用いて世間と厚生労働省他関係部署にアピールする必要があるのではないのでしょうか。

医療の世界には長らく閉鎖的でおよそ「経済」や「効率」の概念が希薄で、大きな問題が発生した際の対処の方法が大局的な観点からの解決策を提示できないお粗末なものではない現状を変える可能性があるのは、疾病の発生を防ぐのも重要ですが、社会医学の使命だと私は考えます。

最後に、他の大学で社会医学に興味を持つ学生との交流の場を設け、私に医師不足の問題について深く考えさせる機会を与えてくれた、このセミナーを主催された本橋先生、金子先生、講師の先生方、その他このセミナーの開催に尽力を尽くしていただいた先生方に厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

Quy Pham Nguyen 東京医科歯科大学医学部 4年

第12回社会医学サマーセミナーに参加させていただき、どうもありがとうございました。三日間は短かったが、合宿みたいな感じでとても楽しかったし、また色々な面で大変勉強になりました。

出発する前に情報収集しなかったのが少し不安でしたが、秋田駅に到着してバスに乗ろうとした時高知大の鈴木君と星野君に出会い、親切に話してくれて安心しました。

秋田県青少年交流センターに着いた途端に講義が始まるので、自分が疲れて集中できないのではないかとしたらそうではありませんでした。高野先生による開講式のご挨拶の中

で強調されたこのセミナーの長い歴史、社会医学の特徴、そして参加して下さった先生方々の熱意を知って、やる気が出ました。

去年と比べて今年度のセミナーは講義が多いとのことでしたが、様々な問題が取り上げられて面白かったです。大学で既に勉強したことでもセミナーのお陰で異なる角度から見る事が出来てとてもよかったです。先生方は講義中でも、飲み会中でも疑問に対して丁寧に答えていただいただけでなく、私の母国であるベトナムに対しても興味を示し、色々アドバイスして下さいました。心から感謝いたします。セミナーのお陰で自分がやりたいこと、出来ることをより明確に分かってきました。

今回のセミナーで一番楽しかったのは他の大学の医学生と会話すること、友達になることでした。それぞれ異なるバックグラウンド、異なるセミナーに参加する理由を持つ人間が集まって医学・教育・社会・人間・（そして恋愛まで!!）といった色々なテーマについて話し合うのは何よりも面白いことです。それがたった三日間で出来たのは一緒に勉強したり、食事をとったり、宴会をやったりする共同作業の時間が多かった他、参加者皆は社交性に富み、周りのことにも興味を強く持つからであると思われまます。会話の中で各々の個性が現われているが、医学生、特に社会医学好きな医学生の共通点を感じました。セミナーの思い出を自分の宝物とし、将来この共通点を発揮できる仕事をしていく間に、今回知り合った友達にまたどこかで会えるといいなと願っています。

最後に、この貴重な機会を与えて頂いた高野先生と中村先生、熱心に講義をしていただいた先生方、そして親切に案内して下さいました本橋先生、金子先生、感謝を申し上げます。秋田の社会医学サマーセミナーは本当に忘れられない楽しい体験でした！

星野 悠介 高知大学医学部 2年

今回、社会医学セミナーに参加するきっかけとなったのは、私が所属する環境医学教室の中村教授が講義の際に、このセミナーを紹介されたことだ。社会医学に興味をもったのは、私が以前、他大学の経済学部を卒業していたので、社会ともっとも関わる医学分野が社会医学だと思ったからだ。しかし、教室に所属してはいるものの、それらしい勉強や活動はほとんどしていないのが現状で、セミナーに参加しても講義や他の学生についていけないのかとても心配していた。

8月20日セミナー当日、秋田空港に降り立ちその暑さに少々ためらいを感じながらも、同じ高知大学の鈴木さんとともに会場に向かった。会場に向かうバスは乗っている客全員がセミナー参加者だったということが、あとで分かった。

一日目の講義は5つあり、それらについて細かいことは書かないが、厚生労働行政についての講義が興味深かった。そもそも、医系技官という職業があるということも知らなかったもので、世の中にこのような職業があるということを知っただけでも収穫だったと思う。講義の後、夕食をとり、お酒を飲みながら、他大学の学生や、先生がたと交流した。高知

にいたるとなかなか他の学校の人と交流する機会がないのでこのような機会は非常に貴重だと思う。

8月21日セミナー2日目、朝3つ講義があった。午後は大瀧村へ行った。秋田の温泉は安くて泉質もよく、最高だった。その後、会場に戻り、中路先生の講義を非常に興味深く聞き、夕食後、交流会。ここでは、金子先生や丹藤先生や、中路先生から主に話を聞かせてもらった。また、日本酒が美味しくて少々飲みすぎてしまった。その後も部屋で他の学生たちと飲み、語り楽しい夜を過ごした。

8月22日セミナー3日目、村田先生の講義を聞き、鯉にメチル水銀含有量が多いということを知り少し驚きながら、犬ぞりの話などを興味深く聞き、グループ発表へ。グループ発表では、各班ともよく準備されていてとても優秀な学生ばかりだと感じた。

全体を通して

今回の社会医学セミナーに参加して、いろんな分野の話が一度に聞けて、かつ全国から集まった他大学の志の高い学生と触れ合えるという、またとない貴重な機会でした。このようなセミナーを準備され開催していただいた先生方に心から感謝しております。次のセミナーでまた皆様と会えれば、そしてもしかしたら、将来仕事で関わることがあれば、そのときはなにとぞよろしくお願い致します。

松田 真樹子 福島県立医科大学 5年

社会医学セミナーでは、全国の先生方の講義を聴けたことはもちろん、グループ討議を通じて自分たちからも社会医学にアプローチできたことがとても良かった。

飽食の時代と言われ、昔ながらの日本の食生活が注目される中、辻先生の「戦前の食事に戻せば寿命が延びる、というのは間違い」という言葉が心に残った。戦後の食生活が寿命を延ばした、という意味でもあると思うが、メディアの影響力の大きさも感じると同時に、与えられた情報をただ受け入れるのではなく、深く考察して自分のものにしていくことも大切だと思った。

福島先生の講義では、ナイアシン、トウモロコシ、パーキンソン病の関係を丁寧に説明して下さり、最新の研究について十分理解できた。

グループ討議では、産業廃棄物の責任をめぐる民と官の問題を3日間考えた。セミナー当日に課題が渡されたが、グループで話し合うことによって様々な意見を聞くことができ、また、自分の考えを論理的に説明することの難しさを実感した。

1つの課題を集中的に3日間考え、自由時間を活用してグループで協力し発表までまとめるのは、大変ではあったが有意義な時間を過ごせたと思う。グループのメンバーとは特に進行を深めることもできたように思う。課題のジャンルはセミナーが始まる以前に、複数の選択肢を示して頂けるともっと良かった。

厚生労働省の方の講義は、将来の選択肢の一つとして伺うことができ、参考になった。

実際どんな仕事をしているのか、どんなことができるのかを知り、医系技官という職業をより具体的なイメージで捉えることができたと思う。

このような社会医学セミナーがあることで、社会医学の様々な研究に触れることができると同時に、先生方とも直接お話しすることができ、良い機会であった。秋田の観光も含まれていて、秋田を楽しむこともできた。今回初めて参加したが、もっと低学年の時期から参加できたら良かったと思った。また、今回は抽選だったのでより多くの人が参加できるよう参加人数を増やしても良いと思った。

今回セミナーを開催するにあたってご協力して下さった先生方、スタッフの方々に感謝しております。本当にありがとうございました。

松原 啓祐 東京医科歯科大学医学部 1年

1年生ながら、初めて社会医学サマーセミナーに参加させていただきました。1年生ということで専門知識を学んでいないので、学生とセミナーでの会話ができるかどうか、レクチャーの内容についていけるかどうか、参加するにあたり不安はかなりありました。今振り返ってみると、多少分からない言葉はありましたが、専門知識の不足はそんなに気にする必要はなかったと思っています。実際、講師の方々は、分かりやすく、面白く、専門知識にとらわれない講義をしてくださりました。また社会医学はそれほど身近な話題が多いともいえるのかもしれませんが、社会医学というのは行政から研究、臨床にいたるまで多岐にわたるものだ、とつかめただけで私にとっては大きな収穫だったと思います。レクチャーでは、普段聞くことのできない他大学の教授の研究の話が聞けたことは貴重な機会であったと思います。ですがそれよりもさらに貴重だと感じているのが、他大学の教授はじめ、厚生労働省の方、さらに他大学の学生までが混じって、自由に会話する機会があったことです。普通に生活しているとなかなか話す機会のない方々と、社会医学に関する議論から、日常生活のこと、恋愛論に至るまで気兼ねなくお話できたことはとても刺激になりました。広い人間関係が少しでも築けたことも大変嬉しく思います。私はもともと、臨床以外には全く興味はなかったのですが、大学での授業をきっかけに、社会医学について少し興味を持ち始め、このセミナーに参加して、社会医学という道も真剣に考えるようになりました。今後どう変化するかは分かりませんが、憧れという域を抜けてないのかもしれませんが……。上級生になり、本気で専門を意識し始めてから参加するのももちろんいいと思います。ですが、私のように1、2年のうちに、普段の授業ではあまり接することのない社会医学に接するのも大きな刺激になると思います。秋田での3日間はとても刺激的でした。まだまだ憧れだとか、イメージだとかそういった域を抜けていない私ですが、今後も自分の進路をみつめ、機会あればまた来年もぜひ参加したいと考えています。

山田 香里 聖マリアンナ医科大学医学部 3年

私は、正直なことを言うと社会医学にそれほど興味は無かったのですが、「面白そう、秋田は行ったことがない。」という軽い気持ちで今回の社会医学セミナー参加を決めました。しかし、セミナーの日が近づくにつれて他の参加者は、社会医学に凄く熱意を持っている人ばかりで自分は浮いてしまうのではないかと心配に思いながら参加しました。

緊張しながら始まったセミナーですが、講義はどれも教授の先生方がお話してくださり、これほど多くの大学の、しかも教授の先生方の講義を聴けたのは滅多にない貴重な機会でした。また、先生方の講義内容もとても幅広い分野に渡っていたことが驚きでした。私の大学では、3年次から“医学と社会”という科目として社会医学の分野の授業が始まります。この授業を受けて4ヶ月の私のイメージとしては、統計が沢山出てきて難しそうとか、産業医学、予防医学などといった非常に抽象的なものでした。しかし、実際に今回の講義で先生方の専門とされていることや現在取り組まれていることを聴き、ある意味とても自由で様々な可能性の広がっている分野であると感じました。実際にお話を伺った先生方も「時にはあまり気の進まない仕事もあったけど、自分のやりたいことが出来る。」とおっしゃっていました。どの講義も大変勉強になりましたが、特に今回興味深かった講義は、車谷先生のアスベストについてのものです。今社会で騒がれているのと、大学でアスベストの工事をしてきたことからとても身近に感じられました。このような大きな問題は社会医学の先生方が研究されているからこそ対策や解決に近づくことができるのだと改めてわかりました。もう1つ、弘前大の中路先生のお話は、“先生は本当に社会医学が大好きなんだ”と思うほど熱意が伝わってきて、聴き入ってしまいました。それから、意外だったのが、どの先生も本当に話し易い気さくな方ばかりだったことです。医学のことは勿論、それ以外のまさか教授の先生とこんなことは話せないだろうと思うようなことまでお話して頂け本当に楽しかったです。また、グループ課題や夜の交流会等を通して他大学の違う学年の方と知り合い、話をすることが出来とても良い刺激になりました。どの参加者もそれぞれの考えがあって参加していて、中では「臨床もいいけど、社会医学は一度に大勢を助けられるから将来はそっちに進もうと思っている。」と話してくれた先輩参加者の話を聴いて、今まで全くこの進路は考えに無かったのですが、新たな選択肢に加わりました。厚生労働省の方の医系技官の話からも、医者といっても道は沢山あるのだとわかりました。

今回軽い気持ちで参加しましたが、とても多くの発見をして、自分の視野が広がったことは確かだと思います。予想以上に刺激的で、こんなに楽しいとは思っていませんでした！リピーターの気持ちがわかった気がします。

3日間このような素晴らしい体験をさせて頂き、先生方本当に有難うございました。

山本 匠 岡山大学医学部 5年

今回、社会医学セミナーに参加することになったいきさつから、話したいと思います。